
すずむし

SUZUMUSHI

Vol. 5 No. 3

1955年 3月

倉敷昆虫同好会

八ヶ岳

井手千代子

山梨、長野にまたがるこの欲ばった名の山へ行こうと決定したのはOさんだった。とにかく山なら何処でも結構なので、無理してついて行くことにした。

名古屋を出たのが24日、25日との境目は中央本線にゆられて、火山の広いすそ野の駅小淵沢に下車したのが朝6時半ごろ。寝不足でふらつく足を山の方向へむけた。一行三名、すでに標高は千米近い。周囲は重い霧に抑えられた如く不活発で、行手は平らな草原が霧に包まれている。反対側の南には、南アルプスの山すそが壁の如く黒々と見える以外何も目ぼしいものはない。道端にブドー園を背高くした如きものが処々ある。何だらうと通りがりの人に聞いたらホップだった。自分の登る山がどれか見たいとあせるのだが、「たしかにこの方向にあるはずだ」との返事だけで、灰色の霧が全てを覆っている。通りがりの青年に、今日の宿泊地、青年小屋までの所要時間を聞くと、三時間半あれば大丈夫という。一同気をよくしてしまった。まばらな白樺、落葉松林をぬけたところより、行手の霧も切れはじめ、はらかな草原のかなたに山の一端が、(想像もせぬならかな姿が)かいま見れるようになった。光の当たった草原は、息をのむ程広く続き、そのぬれた緑色は目に痛い。山はこれがはじめてのNさんは、ため息を盛んについでいる。この草原で、フタスチチョウ、ヒョウモンチョウ(コヒョウモン?)を採集。

九時頃やっと山の高まりにたどりついた。鐘状火山と云うのか、斜面が思い切って急に出来上っている。一面まだ草で、吹き上げる風の中を、小さな蝶がひらひらして仲々足がはかどらない。私達より後の列車で降りたらしい人達に、どんどんおいこされる。十時頃になると、手持ちの水がなくなった。尾根伝いのこの道には一滴の水もない。地図を見ると、水の印はある。ややあって、右下の方向にありの指導標に出会った。水の名は延名水とある。いずれの人も、ここまで来るとのどのかめき具合が丁度良くなるらしい。水の冷たさに他の山を想い出して、尾根までもどると、又ほしくなる。

下からホイ、ホイ、としぶい声が上って来た。木こりが馬を上げているのだった。私達はリュック一つでふうふう云っているのに、馬はちゃんと車を引っぱっていた。木こりの爺さんの緊朴さにひかれて、秋の山、たけがりの事等の話で大休止の後、すでにカンカン照りの日の下を、細い道、太い道をたどる。雲表に出た。このあたり1600m位のように、見はらしのよい処へ来れば、白雲をまとった南アルプスが、目の前にむっくりと連なり、その黒さに、何か恐ろしいような気がする。

そろそろ樹木地帯に入った。同時にブンブンと侍従がついて来る。前の人のお尻のあたり、だんだ

ん大きなあぶの数が増える。自分のは知らない。止ると、ところきらわすくつついて、ちくりとさす。大豆の二倍はある身体をしている。増々木は茂り、侍従は多く、のどもかわく。2000米を越したであろうか、植物の方は、もっぱらよく採集している様子。蝶はヒカゲチョウのみ。針葉樹の増しはじめる頃より、急にシャクナゲが混じらす。上になると花の咲いているのに出会う。ヤバナシャクナゲとか。人の手にふれないあたりのは、何とも云えず清そで、山のニフのようだ。

時はたっても、小屋にはまだ遠い。のどはカラカラになった。常ならば水の出る場所も、この十日間照りつづけて今は出ないと云う。うらめしげに、そこ此処の苔をめぐってなぐさめて見た。2000mを越せば、1000m上るにも時間がかかる。すでに周囲は、アオモリトドマツの針葉樹ばかり。それも年寄り然と、太くて、苔をたっぶり身にまとって、梢の方なぞ見ることも出来ない。気がつけばあたりは岩、土、木の区別なく一面の苔で、何もかも苔の布団をかけたようだ。もうアブはいない。すでに3時を過ぎる。駅を出てから9時間余り。あまり小屋に着かないのでとうとうOさんがその脚にものを云わせて先にゆくことになった。山の少々東に廻った道はうす暗くて、後の二人はいよいよ心細くなって来た。とにかく足を動かしていると道が又尾根に出たのか前より明かるい。腰を曲げて歩く道の左に鐘詰のあきかんが折れ木にふせてある。いたすら者もいるものだと思って休みがてらわざわざ取り上げて見たら、何やら字が書いてある。元気を出せ、O。の意味を読み取ることが出来た。効果てきめん。とにかく元気が出た。もうすぐらしい。すごい馬力をかける。

急に木がなくなって目の前に飯ごう炊事の煙が上っている処へ出た。うれしい。たしかにもう近い。近づいて見廻してもそれらしい建物が無い。導標を見ると前方にむかった矢印に青年小屋とある。その方向を見ると赤さびた木とトタン板の掘立小屋があった。そのむこうはアオモリトドマツばかりでそうするとやっぱりそれらしい。周囲を一巡してやっと入口を見つけて荷物をおくと、いろいろの煙にむされて外へとび出した。主峰に遠い山の麓部にあるこの小屋は番人無しで、どさのある処は三人位がせいっぱいと、後は士間と観察したが、すでに先人が4、5人居る。さて今夜はどこに寝るのか？ まあいい。とにかく水がほしい。遠い水場へOさんの名を呼びながら、倒木をとび越しつつ走って行った。

編 集 後 記

自然は冬眠から覚め、はげしく動いています。モンシロもとくに現われましたが、いかがお過ごしでしょうか。本号は夏山の採集記を載せました。

理
化
学
器
械
テ
レ
ビ
コ
ー
ダ
ー

生物・地学標本模型
昆虫採集用具
テレビ・ラジオ・真空管

島津製作所岡山県代理店

サ力工商会

倉敷市栄町（赤木病院西）電話913番

志賀製品

昆虫・植物採集用具

理化学器械

岡山市西中山下（柳川交叉点東）

長瀬教育堂

電話 4725番

すずむし 第5巻 第3号 昭和30年 3月 25日印刷

昭和30年 3月 25日発行

編集兼
発行者 倉敷市住吉町 岡山大学農業生物研究所

害虫学研究室内

倉敷昆虫同好會